

こわもて・ざ・ろっく！

猫又侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

吉田幸樹、16歳。

ごく普通の家庭に生まれ。

ごく普通の学校生活を送り。

ごく普通の高校に通う高校一年生であり。

——ごく普通の強面ぼっちである。

目 次

| | | | | |
|--------------------|----|----|----|---|
| #1 強面ぼっちと根暗ぼっち | | | | |
| #2 強面ぼっちとヤンキー店長(?) | | | | |
| #3 強面ぼっちと結束バンド | | | | |
| #4 強面ぼっちと歌うま陽キャ | | | | |
| #5 強面ぼっちとエナジードリンク | | | | |
| | 24 | 18 | 12 | 6 |
| | | | | 1 |

#1 強面ぼつちと根暗ぼつち

俺、吉田幸樹よしだこうきがぼつちなのは人と話すのが苦手だとかコミュ症だからと言うわけではない……決してその可能性がないとは言い切れないが。兎に角、ごく普通の高校生活を送るごく普通の高校なのだ。

今の状況だつてクラスのみんながワイワイ話している教室の片隅で趣味の読書に勤しんでいる。おそらく、クラスメイトのみんなは話したいに決まっている。

なにせ、ここ最近映画化されて話題になつてている小説を読んでいるのだ。話のネタには困らないし、話しかけられてもサッと対応できる自信はある。

たが、おそらく俺が読書に集中していると思い込んで誰も話しかけるタイミングがなくて話しかけてこないだけだ。だから決して、決して誰一人として俺の机の周りに集まろうとしてないないのは不思議な事ではないのだ。

「……はあ。これでもダメか」

大きくため息をついて文庫本を閉じる。

これで、思いつく限りの友達を作る方法は試した。

高校に入学して早一ヶ月、小中では作れなかつた友人を作るべくあたりとあらゆる手段を講じた。ある時は人気バンドのCDを置いてみたり、ある時はアニメグッズを置いてみたり、ある時はアイドルのグッズを置いてみたり……結果は全て惨敗。友人を作るどころか、誰一人俺の周りに集まることはなかつた。

それもそのはず、俺はごく普通の高校生と自称してはいるがある一つの問題を抱えている——そう、顔が怖いのだ。

所謂強面と言つて誰かに話しかけようにも、一人残らず悲鳴を上げ何処かへと立ち去つてしまふ。逆に話しかけられないからと期待しながら腕を組んで机に座つても、誰からも話しかけられる事なく逆に離れていた。

わざわざ小中の俺を知らない新天地の学校へ進学したにもかかわらず、結果は小中と変わらない。もつと言えば、不良だと勘違いされ

ることが多くなつた。

先生は素行の良さを知つてゐるので問題児としてみられてゐる事はないのだが、やはり強面のせいか積極的に話されることはない。更に、俺は他の人よりも声が低いため相手に威圧感を与えることもしばしば。

自分の悪いところを知つてゐるのなら、解決できるじやないかと思つたそこ。そんな簡単に解決できるのなら、俺は既に友達を作つているし教室の隅つこで怯えられながら毎日を過ごしてゐる訳ないだろ。

「はあ、友達欲しい」

そんな願望を呟いても、俺の願いを聞き届ける者はいない。

俺は教室の中で一際ワイワイと賑やかな集団に目を向ける。その集団の真ん中では一人の赤髪の少女——喜多郁代が笑つていた。彼女が笑うと周りが笑い、悲しむと悲しむ。そんな彼女の人気が羨ましく思いながら朗らかな笑顔に俺の強面がどれだけ人に怖がられてゐるのかを実感し打ちひしがれていた。

自分の無力さに打ちひしがれるのには耐えられなくなり、席を立つとまつすぐとある場所に向かう。この学校にはたまにしか空いていないが、空き教室が存在する。しかも、そこは大抵昼休みには空いている。俺の昼休みのランチタイムの場所といえば、そこが定番だった。

教室や廊下の喧騒が小さく聞こえる程度の場所にあるその教室は居心地が良く、誰に怯えられることもなく平和なランチタイムを過ごすことができる。

「失礼します……やつぱいたか

「し、しししし失礼してます」

空き教室に入ると、窓側にジャージにスカートと言う不思議な着こなしをしている一人の女子生徒が座つていた。その傍らには何かの楽器のケースが置かれており、この場で最も存在感を発してゐた。「別に、俺も勝手に使つてんだしどクビクして飯食うことないだろ？」怒られる時は一緒だ」

「お……怒られるん……ですか？」

「まあ無断で使つてるからな。でも中々先生来ないし、大丈夫だろ」

そう言つてもなお隣でブツブツと独り言を言い始める彼女の名は後藤ひとり。俺と同じく、クラスに馴染めず友人を作ることができないぼつち同盟の仲間である。ちなみに、ぼつち同盟は俺が勝手に作った同盟であり後藤がそれを知ることはない。

後藤と知り合つたのは二週間前、いつも通りの時間に空き教室に来た時に先客として後藤が昼飯を食べていた。あつた当時は拳動不審で目も合わせてくれないし、話を振つても「え……あ……その……」と会話のキヤツチボールが壊滅的でここ最近ようやくまともに会話が出来るまでになつた。

「そういうや後藤、それどうしたんだ？」

「え？ あつ……ぎ、ギターの事……ですか？」

「ああ、ギターなのねそれ」

入つてきたときから気になつていた楽器のケースはギターケースらしく、なんだかカツコいいと思つた。勿論、ギターを持つていると言うことは演奏ができると言うこと。

ダメもとで後藤に演奏でも頼んでみようかな。

「なあ後藤」

「は、はい！」

「……なぜ金を差し出してくる」

「ま、まだ……足りない……ですか？」

「いや、別にお金とかの話じゃなくだな。その……後藤のギターを聞いてみたいな……なんて思つたり」

少し小つ恥ずかしくなり、頭を搔きながら窓の外を見ながらぼやく様に言う。

いや、こんな頼み方では引き受けもらえないかも知れないのは分かつてゐるがやはり女子と面と向かつて話すのは慣れない。それが例え、人と目が合わせられないほどの陰キヤでありぼつちだとしてもだ。

「む、無理ならいいんだ。ダメもとで頼んでるだけだし」

「わ、私のギター……なんかで……よ、よろしければ」

「いいのか？」

「は、はい……い、いつも教室……使わせてもらつてますし」

俯きながらも会話を続けてくれる後藤は今どんな顔をしているのかは分からない。もしかしたら、嫌そうな顔をしてるかもしれないし嬉しそうな顔をしてるかもしれない。

後藤ひとりと言う人間について、俺はまだ知らないことが沢山ある。もし仮に、もっと後藤について知ることが出来るのなら……ぼつちの同士として知りたい。

「じゃあ、聞かせてもらうよ」

「は、はい……よ、よろしく……お願ひします」

あたふたしながらもギターケースからギターを取り出し、慣れた様にギターのチューニングをする後藤の姿勢はなんだか様になつていた。

ある程度の準備を終えると、ゆっくりとギターを弾き始めた。人前で演奏することがないのか、それとも苦手なのかは分からないがこちらをチラチラ見ながら演奏している。

でも、俺はそんな事気にする事なく後藤の弾くギターの音色に耳を傾けていた。

曲は決して落ち着く音楽ではなく、むしろロツクな曲だった。それでも、俺はギターを一生懸命に弾く後藤を見て音を聞いてどこか落ち着いていた。

気がつくといつの間にか演奏が終わっていて、後藤は心配そうにこちらを見ていた。おそらく、自分の演奏が下手だつたのか心配しているのだろう。

「後藤」

「は、はい……へ、下手……でしたよね」

「いや、すごく上手かつたぞ」

「そ、そんな事ないですよ……うへつ、うへつへへへ」

「いやいや、そんな事あるって。まだ一回しか聞いてないけど俺、後藤のギター好きだぜ」

「うへえ?!」

「だ、大丈夫か?!」

ギターのことを褒めたのが気に障つたのか、勢いよく椅子から転げ落ちる後藤。ギターは無事だが、後藤が無事ではなさそうだ。

なんだか溶け始めている……溶けてるだと?!

目の前で起こる確かな現象に慌てていると、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

「あ、やべ」

「あっ、あの……わ、私……お、お先に戻ります！」

そう言つてギターをパパッと片付けて出て行く後藤の背中を唖然として見送るとハツと我に帰り、俺も急いで教室に戻る。

教室に戻る途中、トイレに寄るとトイレにいた全員に悲鳴を上げられた——解せぬ。

#2 強面ぼつちとヤンキー店長（？）

現在時刻は午後四時を周っているが依然として太陽は頭上に位置している。

唐突ではあるが今現在、俺はとてつも無くやばい状況下に置かれて居る。

どれくらいヤバいかといえば、続編を心待ちにしていた映画の続編が唐突に発表された時くらいやばい。え？ どれだけヤバいか伝わらない？ お金払おうとしたら財布に金が入ってなかつた時ついてえば伝わる。

目の前には明らかに不良数名がこちらを睨みつけており、逃げ出そうにも背後には金髪ヤンキー風のおねえさんが俺を盾にする様に立つてている。

いや、実際に盾にされている。

「えつと……この状況は？」

「見て分からぬのか？ 徒姉が不良に絡まれてるんだ、助けるのは当然だろう？」

首を傾げて「何か変なことが？」みたいな顔をしているが、俺はこんな金髪のおねえさんと関わりを持つたことはないしそもそも知り合いにそんな人がいた記憶もない。

なにか言い換えそうにも目つきが鋭く、何も言い返せない。

畜生、後藤意外と日頃から喋つとくんだつた。いや、そもそも誰も喋つてくれないんだつけ。

「おいガキ、悪いことは言わねえ。そこのねえちゃん引き渡しな」

「そ、そう言われましても……」

「ほら、徒姉を守れ！」

「アンタは他人事すぎるんだよ！」

路地裏で面倒事が起きるなんて漫画やドラマじやあるまいしとは思ふが、今はそんな事悠長に考えている暇はない。

俺は見ての通り強面ではあるが喧嘩は得意ではない。
故に、この状況はとてつも無くヤバいのだ。

「何したんですかアンタ」

「いや、未成年喫煙はダメだろ」

「勇気は尊敬しますけどこんな事になる前にさつさと逃げて下さいよ！」

ジリジリと距離を詰めてくる不良達に俺も金髪おねえさんも少しずつ壁に追いやられていく。

人通りの少ない路地裏でどうこの状況を乗り切るか、思考を巡らせていると不良達の背後。僅かに見える景色の中に、警官の姿が見えた。

俺は大きく息を吸い込んで、ありつたけの大声で叫ぶ。

「お巡りさああああああああああん！ 今カツアゲされてまあまあまあまあまあああああああ！」

「ばっ！ テメエ！」

「うるさいぞ」

「アンタはもう少し危機感持つて下さいよ！」

お巡りさんが俺の声に気付きこちらに向かってくる足音が聞こえる。不良達もそれに気付いたのか、直ぐそばの細い道にそそくさと消えていった。

まさか下北沢でお使いを頼まれてきたらこんな事件に巻き込まれるとは、思つても見なかつた。

「お前、怖い顔してる割に威勢がないな」

「アンタは威勢がありすぎるんですよ」

「アンタじゃない。伊地知星歌だ」

「じゃあ伊地知さん。人を外見だけで判断するのはおすすめしないですよ」

「そうか、善処しよう……強面男子」

「はあ……幸樹です、吉田幸樹。分からなにならせめて聞いてくれません？」

金髪おねえさん——伊地知さんは色々ストレートな人だ。

ひとのコンプレックスに容赦なく豪速球投げてくる。怖いよこの人。

取り敢えず駆けつけた警察に事情を話し、その場を後にする——なんかまだ後ろに居るんですけど？

「えつと……まだ何か？」

「お札をしようと思つてな。あと私の家こっち方面だし」

「ああ、お札なら結構ですよ。盾にされるの慣れてるんで」

主に後藤からだが。

「そう言われても、こつちは年上としての意地がある。大人しくついてきてもらおう」

「え？ ちょっと、ぐえつ！」

くつ、苦しい。この人容赦なく襟摑んで来たしなんなら引き摺る様に歩いてるから俺の首がしまつて上手く呼吸ができない。このまま帰ろうとすると確実に死ぬ。

ここは大人しく従おう。

「分かりました……分かりましたので……襟詰して下さい」

「ようやく分かったか……何してんだ？」

「ぜえ……伊地知さんの……ぜえ……せいですが？」

この人何が悪いのか理解してないよ絶対。だつて可愛らしく首傾げちゃつてるもん。

あと、動作は可愛らしいのにいちいち鋭い目つきで見られるとビクビクするので辞めてもらつていいですか？

抵抗も虚しく、伊地知さんの向かうがままに着いていくと地下につながる階段の様なものがある建物に着いた。階段を下り、ドアの前に着くと『STARRY』と書かれていた。

「えつと、ここは？」

「私がやつてるライブハウス。ほら、こつち来な」

「ライブハウス……」

噂に聞くパリパリ達が集う場所。

俺の様な強面ぼっちが行ける様な場所では無いと諦めていたが、まさかこんな形で入る事になるとは。

中に入ると、宴会場みたいに広い場所かと思っていたがそこまで広くはなかつた。少し薄暗い室内、後藤が好みそうな環境だ。

店内はまだ準備中と言つたところだが既にテーブルは綺麗に配置されており、あとはライブ開始を待つのみの状態の様だ。

「はい、お礼」

「お礼って……このコーラですか？」

「すまんな。今これ以上のお礼はできない」

「まあそこまで高望みしてなかつたんで俺はいいっすけど」

プラスチックのコップに刺さつたストローに口をつけコーラを喉に流し込む。

まだ春とはいえ少しづつ暑くなり始めてきたので冷えたコーラが喉を潤し、刺激を与えてくれる。

ちびちびとカウンターでコーラを飲んでいると、ふと伊地知さんが隣に座る。

そういうや、この人この店の店長だつけ。

「この後用事はあるか？」

「いえ、特には」

お使いを頼まれては居るがそこまで急ぎでは無い。

家も下北沢から少し距離はあるが帰るのにここまで時間がかかる距離にある訳でも無いので、少しばかりくつろぐのも悪くは無い。「そうか。なら、もう一つお礼と言つてはなんだがライブでも観ていつてくれ」

「ライブですか……それって俺居て大丈夫ですかね？」

「それはどう言う——」

「ヒエッ！」

伊地知さんが不思議そうな顔をしていると、背後から小さな悲鳴が聞こえる。

後ろを振り向くと、高校生くらいの女子が立っていた。見るところ、うちの高校の制服では無いがこの近くの下北沢高校の生徒だろう。

その顔は明らかに怯えており、その視線の先には俺が居る。

俺の不安、それは俺自身。

ただでさえ普通にしても強面で人が近寄らないのに、こんな薄

暗いライブハウスで俺みたいな奴がいればそれは誰でも怯えるだろう。

「まあ、こういうことです」

「なるほど……」

この現状を理解してくれたのか、深く考え始める伊地知さん。

なんだろう、よくわからないけど嫌な予感しかしない。

「じゃあ客じゃなくてバイトって事にすれば不自然じやないんじやない？」

「お、おう……」

予想の斜め上を突いてきたなこの人。

しかしバイトか……そういえば、高校に入つてから親に社会経験だとか言われてバイト進められてたけど結局友達作るのに必死で何もやつてなかつたな。

「まあそれなら……ちょうどバイトしようかとも考えてたんで」

「なら好都合だな。今日からここのバイトな」

「え？ 面接とかは？」

「――大丈夫だろ。あ、バイト中は店長つて呼びなよ」

「ええ……」

「なんだろう、不安しかない。

「取り敢えずそろそろライブ始まるから控え室にいる妹に声掛けてきてくれない？」

「妹？ 伊地知さん……いや、店長つて妹居たんですね」

てっきり一人っ子の自由奔放な人かと思つていたが、お姉さん属性があるのか。年上か……いや、ないない。バイト先の店長と友人になるなんてねえ？

取り敢えず店長に指示された通り、控室に居る妹さん+バンドメンバーを呼びにいく。

「あ、バンド名つて何なんですか？」

「結束バンドだ」

「……結束バンド？ あの結束バンドですか？」

「まあ気にするな」

凄く気になるんですが……いや、今は仕事中だからシャキッとした

いと——あれ？ 僕つてお礼されに来たんだよね？

本来の目的とは少し違くなつたが今回は店長に言えばすぐに上がるだろう。

控室の前の扉に着くと、コンコンと2回ノックする。

「はいはーい——ひえつ！」

「どうしたの虹夏……おう」

「えつと……結束バンドの皆さんですよね？」

控室に入るや否や、店長似の顔にサイドールの髪型をした少女と肩の上で切り揃えられた髪に泣きぼくろがある少女が俺の顔を見るなり怯えていた。

いや、泣きぼくろ少女の方は表情分からぬけど。

「あ、貴方は……」

「俺は吉田幸樹つて言います。店長さんの知り合いで今日からここでバイトすることになりました」

「あ、あ～」

全然聞いてないんだがとでも言いたいような顔をする店長似の少女。いや、分かるよ。だつて今さつき決まつたことだからね。

ふと、部屋の奥のゴミ箱で何がピンクの物体が動くのが目についた。不思議に思い近づいてみると、意外な人物がゴミ箱の中でうずくまつっていた。

「——後藤？」

「へっ？」

ゴミ箱にうずくまつていたのは昼休みに昼食を共にし、華麗なギター捌きを見せたぼっち仲間——後藤ひとりその人が居た。

裏切つたな後藤。

#3 強面ぼつちと結束バンド

「裏切ったな後藤お……」

「あつ……え？ な、なんでここに吉田くんが？」

「バイトだよバイト。こここの店長の手助けしたらバイトしないかつて言われてな」

「へ、へえ～」

意外そうな顔をしてるが後藤こそ意外だろう。

いつも教室で一人過ごしているぼつちがまさかこんなロツクバンドを組んでいたとは、人は見かけによらないものだ。いや、俺もつき店長にみかけで判断するなと言つたばかりだつたな。反省反省。

「それで？ 後藤はぼつちだと偽り俺を騙してたのか？」

「あつ、いえ……それは……」

「違うよ。ひとりちゃんは私が今日だけリードギターとして誘つたんだよ」

「えつと……」

「私は伊地知虹夏、下高の二年だよ。こつちは山田リョウ、同じく二年生」

あ、二人とも先輩だつたのか。

「改めて、秀華高一年の吉田幸樹です。強面ですがただのぼつちです……いや、強面だからぼつちなのか」

「あ、あはは。ひとりちゃんみたいだね～」

はたして、それは褒め言葉なのだろうか。それとも貶されているのだろうか。

ひとまずライブ開始前だと言うことを伝え、控室から出て行こうとすると僅かに服が引っ張られる。

背後を振り向くと、僅かにゴミ箱から這い出た後藤が俺の服を掴んでいた。

「後藤？」

「あつ……えつと……その……」

「……ゆっくりでいいよ」

「あつ、あの……え、演奏……が、頑張ります」

「おう、後藤のギター期待してるぜ」

フツと笑つて見せると、後藤もフツと笑う。後藤はいつもガチガチだがたまに見せる自然な笑いに実はドキッとしたしなかつたり。

これ以上居座ると店長から何か言われそうなので後は後藤を二人に任せ、フロアに戻る。

「伝えてきました」

「ああ、ありがとう」

「妹さん、明るそうな人ですね」

「そうだろ？ 今日のあのギターだつて公園で見つけて連れてきたつて言うんだ」

「行動力の化身ですね」

店長の妹さんは話していくも陽キャオーラと言うか、誰にでも優しくできるオーラを放つていて。現に、強面ぼつちの俺にも部屋を出る際に手を振つてくれていた。

あれはまさに天使だな。

「吉田……虹夏に手出したりしないだらうな？」

「も、ももも勿論ですとも。そ、そそそそなことする訳ないじやないですか？」

心臓に悪い、店長絶対エスパーだ。いや、エスパーじゃなくともエスパーだよこれ。Mr. マリック越えてるつて。あれ？ Mr. マリックはマジシャンだつけ？

「ほんと、顔に出やすいよな吉田つて」「が、顔に出るんですか？」

強面の表情が分かりやすいつて、もはやにやけてる時は般若にでも見られているのではないだろうか。

「でも結束バンドなんてバンド初めて聞きましたよ。最近結成されたんですか？」

「いや、今回はインストバンドだ。まあ、思い出作り程度にはな」「思い出作りつて……」

「まあみてれば分かるよ」

店長の意味深発言が気になりつつも、ライブが始まる。どのバンドも有名所とまでは言わないが、それぞれに個性があり聞いていて乐しかった。

そしてついに、結束バンドの出番になつたのだが――

「なんだあれ」

「完熟マンゴーって書いてますね」

ドラムは伊地知先輩、ベースは山田先輩、そして三人の中でも異彩を放つダンボールに包まれた人物はそう……後藤である。
いや、なぜそうなつた。

百歩譲つて下を向いて演奏とか、背中向けて演奏とかなら分かるよ？ でもなんでダンボールの中なんだよ。LBXだつてダンボールの中で堂々と戦つてるだろ。

俺と店長が完熟マンゴーに戸惑つていると、伊地知先輩のドラムに合わせて有名な曲のカバーを演奏しめた。

* * *

「ミスりまくりだつたな」

「ううつ…………もう生きていけない……」

ライブが終わり、店長から早めに上がる許可を得て後藤と二人で帰り道を歩く。俺も後藤も同じ方向の電車に乗るので、登校時もよく出くわす。

隣で明らかにゲンナリしつつも、またあの結束バンドで演奏できることに喜んでもいるようだつた。

「それにしても、偶然出会つたギタリストが後藤とは。伊地知先輩は中々の運を持つてるな」

「そ、そんな……貧乏くじだよ……」

「はあ。天下のギダーヒーロー様が何言つてんだか」「ひ、人前では……あんまり演奏とか……しないから」

今日のライブでは散々なミスを犯して いた後藤だが、その正体は登録者3万人を誇るギタリスト『guitar hero』。俺がギターヒーローを知つたのはつい最近であり、後藤がギターヒーローだ

と知ったのはつい数日前。

後藤が両親の勧めでYouTubeで動画をアップしていると言う話題になり、興味本位で聞いてみるとギターヒーローだったと言うわけだ。後藤本人も、リスナーと共に昼食をとっているとは思つていなかつたようでその日は終始ニヤニヤしていた。

「でも、結束バンドのメンバーとしてやつていくなら人前でも弾けるようにしないといけないんじや無いのか？」

「そ、それは……」

「でもまあ少しずつでいいんじゃないか？」

「え？」

「俺はまだ後藤の全てを知つてゐる訳じやないし、何かを強制する立場でもない。でも、もしも後藤が結束バンドとして頑張ろうと思つてんのなら——俺はお前を応援するぜ」

「よ、吉田くん……」

なんだろう、なんだか急に恥ずかしくなつてきた。

顔が熱くなつてくるのを感じ、少し後藤の前を歩く。

後ろでは後藤が「うへつ、うへへつ」といつもの笑い声を上げている。

もしも、後藤が結束バンドとして成長していくか人前で自信を持つて演奏できるようになれたとしたら……それは俺にとつても嬉しいことなのだろう。

後藤がどう思つてゐるのかは分からないが、口には出さなくとも少なくとも俺は友人だと思つてゐる。もしかしたら、後藤はただの強面ぼつち野郎だとしか思つていらないのかも知れない。

それでも、後藤のすぐ近くで後藤の成長を見守ることができるので、俺は出来る限り後藤の手助けをしてやりたい。

そんな事を考えつつ、俺と後藤はライトに照らされた下北沢の道を歩く。

いつか後藤が、結束バンドが舞台の上で輝くことを願いながら。

「あ、そういえば……う、裏切りというのは……」

「……許そう」

バンド組無事になつたのが少し羨ましいとか、そんなんじやないんだからね！

「……誰もいねえ」

家に帰宅すると、そこはもぬけの殻だつた。

流石に私物くらいはあるだろうと思つていたが、それすらない。泥棒にしては持つて行き過ぎたろうし、おそらくうちの親父がまた何かをしでかしたのだろう。

しばらく玄関で棒立ちしていると、スマホから着信音が鳴る。
相手はもちろんバカ親父。

「もしもし」

『あ、もしもし幸樹か？』

「一体何をした？」

『まあそう怒るなつて——父さん海外転勤になつたんだよ』

「は？」

『幸樹ももう高校生だからつて母さんも着いてくるつて言つてな。でも流石に一人暮らしへ厳しいだろうつて事になつて、父さんの実家に荷物送つといたから』

親父の実家。

それを聞いた途端、俺はスマホを床に落とす。

画面にヒビが入つたかもしれないがそんな事を気にしている場合ではない。

親父の実家……それは学校からやく一時間かけた県外に位置する余りにも遠い場所だつた。

「やりやがつたなクソ親父いい！」

『はつはつは！ それじゃあ楽しい高校生活を謳歌したまえよ我が息子！』

言いたいことだけ言つてスッキリしたのか、ブツつと電話を切られた。

最悪、学校まで二時間かかる事は許そう。

「親父……終電が出る前にはそれを言つて欲しかつたよ」

その日は結局、近くの格安ホテルで一夜を過ごすことが決定した。
あの親父、帰ってきたら必ず殴る。

#4 強面ぼつちと歌うま陽キヤ

みんなが楽しくハッピーに過ごす自由な一時、昼休み。

しかし、俺はいまどんでもない修羅場の真っ只中の居た。

「喜多、少しいいか」

「え？ よ、吉田くん？」

俺自身、修羅場の真っ只中という感覚はないのだが明らかに周りがざわつき始め俺を見る目線が鋭くなっていた。

俺が話しかけた人物——喜多郁代もまた、話しかけられるとは思つていなかつたのか驚きの表情が窺える。

なぜこんな強面ぼつちがクラスの人気者に声をかけることになつてしまつたのか、それは僅か数日前に遡ることとなる。

* * * *

「と言う事で第一回結東バンドメンバーミーティングを開催します

！ ハイ拍手！ パチパチ！」

伊地知先輩の元気な声がSTARRYに響き渡り、後藤や山田先輩も続けて拍手をしている。そして、なぜか全員の視線が俺へと注がれておりしばらくの沈黙ののち俺も小さく拍手をする。

本来なら開店前の準備をする時間なのだが、なぜか俺は伊地知先輩に引っ張られ結東バンドのメンバーミーティングに参加させられたいた。

「あ、あの伊地知先輩？」

「ん？ どうしたの吉田くん」

「俺って要ります？ 結東バンドのメンバージやないですよね？」

「吉田はぼつちの補佐役」

「ほ、補佐ですか？」

「そうそう！ ぼつちちゃん、どうしても吉田くんも一緒にうつて言つてたし。ね！ ぼつちちゃん！」

「あつ……はい……」

なるほど、学校でも唯一少しまともに話せる俺をここに置く事で少しでも話をスムーズに進行しようと云う魂胆か。しかし、伊地知先輩

達であればそこまで話に詰まる事はなさそうだが……まあ保険だと思えばいいだろう。

「分かりました、でも店長が帰つてきたら怒られるの俺つて事考えますよね？」

「……思えばあたし達そんなに仲良くないから何話せばいいか分かんないや」

「おう、この人わかりやすく話逸らしたぞ。俺じやなきや見逃しちゃうね……いや、普通に分かるか。」

取り敢えず俺は帰つてきた店長にしばかれるのは確定された。

そんな俺の絶望も知らぬ顔で山田先輩がスッと大きなサイコロを取り出す。それつてバライティーとか宴会とかでやる奴では？ しかも何そのバンジージャンプつて。

「何が出るかな？ 何が出るかな？」

「でででんでんでででんでん」

伊地知先輩がサイコロを投げると、最終的に『学校の話』という話題の目が上になる。この話題は俺と後藤詰みなのでは？

「学校の話、略してガコバナ～！」

「語呂悪つ！」

「はいどうぞ」

「そして振りが唐突?!」

「ええつと……あ、そういうえば二人とも同じ学校」

後藤がハツとした声で二人を交互に見る。このまえ自己紹介された時に言っていたが、後藤には言つてなかつたのだろうか。

「そう、下高」

「二人とも家が近いから選んだ」

「二人とも下北沢に住んでるんですか？」

「そうだよ。あれ？ 二人とも秀華高でしょ？ 家ここら辺じやないの？」

「あつ、いや……県外で片道二時間です」

「え?! 二時間!!」

そう、この後藤ひとりの実家は下北沢から約二時間の神奈川県に位

置している。そういえば、親父の実家も神奈川だつた気が……いやいや、流石に神奈川だとしても近所にはならないだろ。

「高校は誰も自分の過去を知らない所に行きたくて……」

「はい！ ガコバナ終了～！ つと、そういえば吉田くんの家はどこにあるの？」

今ものすごくついで感を出されてきかれているが、さすがに後藤の作り出したこの空間には耐えられないのはわかっているので知らないふりをしながら会話を続ける。

「そうですね……俺は元々下北沢がら少し離れた場所に住んでたんですけど家庭の事情つて奴で俺も県外に行くことになります。奇しくも後藤と同じく二時間かかります」

「な、なんて偶然……」

「まあ俺も過去を知らない人がいる高校を選んだんですけどね」「はい、今度こそ終了～！」

すみません伊地知先輩、ぼつちは大抵そんなもんなんです……いや、それでもないか。俺と後藤が変なのか。うつ、急に胃が！

それから音楽の話しへと移り変わり、そこでも後藤の一人ワールドが展開され結束バンドなのに結束していないうことに笑ってしまい伊地知先輩に叱られてしまつた。

というか、伊地知先輩は子供っぽいと言えば子供っぽいのに何故か母性が溢れている。そう、言うなれば下北沢の大天使ニジカエルと言つたところだろう。

そして後藤がサイコロを振ると『ライブの話』というマスが出たが、そのタイミングで店長にお呼ばれしてそれ以降のミーティングに参加することはなかつた。

清掃中に後藤がこちらに助けを求めてくる様はなんとも面白かったが、ぼつちの同士であるためその気持ちは痛いほど分かる。頑張れ後藤。

* * *

「……大丈夫か、後藤」

「ううつ……バイト嫌だ……働きたくない……社会が怖い」

バイト終わりの帰り道、俺の隣を歩く後藤は明らかにゲンナリしていて今にも溶けそうだつた。

その原因はメンバーミーティング中、バンドのノルマを支払うためにバイトをする提案をされ断れない性分の後藤はSTARRYで働くことが決まった。

伊地知先輩や山田先輩、俺もいると言うのに当の本人は先程から同じセリフを何度も讐言のように呴いている。いや、そろそろ怖くなつてきたのでやめて貰えないですかね？

「大丈夫だつて、俺とか結束バンドの二人も居るし……な？」

「ううつ……それでも怖い……」

「はあ……あ、そういうえばボーカルがどうのつて話はどうなつたんだ？」

結束バンドは前回はボーカルなしのインストバンドと言うやつらしく、伊地知先輩達はボーカルを入れたしつかりとしたバンドをしたいらしい。

「あ、その……STARRYで募集する……って話に」

「募集ねえ——そういうえば、俺のクラスに歌上手いって奴がいるから聞いてみるか？」

「い、いいの？」

「まあ、後藤が結束バンド続けるためだしな」

「な、なら聞いて見て欲しい……かな」

「おう」

* * * *

そして、現在に至る。

「……周りがうるさいな」

「え？ そ、そうかな？」

「場所、移せるか？」

「え！」

周りの視線が余すことなく俺に注がれている。目立つのが苦手かつ、ヒソヒソ話をされるのが苦手なので喜多に場所の移動を提案してみたのだが……だれだ「カツアゲだ」とか言つた奴。

しかし、このままでは話すに話せない……。

「タイミング悪かつたか？」

「えつと……そう言う訳じゃなくて……」

俺の顔をチラチラと見てくる喜多。おそらく、喜多も周りと同様力ツアゲされると思っているのだろうか。流石にこんなに人がいる中でカツアゲなんかする勇気はないし、する気もない。

「因みにカツアゲではないからな？」

「へ？ ち、違うの？」

「少し相談事つてやつだ」

「そ、そうなのね……でも相談ならここでも」

「こんなに見られてて落ち着いて相談なんてできると思うか？」

「そ、そうよね！」

喜多はガタツと席を立ち上がると、友人に一言声をかけると俺の手を引き廊下に出た。

珍しく廊下に人気は少なく、ここなら多少聞かれても大丈夫そうだ。

「そ、それで相談つていうのはなにかしら？」

「ああ。俺のバイト先の先輩がバンド組んでるんだがボーカルが居なくなつちまつたらしくてな。喜多、ギターできるし頭上手いって話しだがら頼めないかと」

「へえ、ちなみにどんなバンド名なの？」

「バンド名は『結束バンド』でメンバーは下高の二年の先輩二人と俺の友人が一人。下高の二人は人辺り良いし大丈夫だと思——「ごめんなさい！」へ？」

「私、そのバンドには入れない」

「え？ ちよ、待つ……」

「そう言うことだからーー！」

なぞの捨て台詞を吐き何処かへと走り去つていく喜多の背中を眺めながら、俺は嘆然とするしかなかつた。

「どう言う事だつてばよ……」

ガツクリと肩を落とし、自分の机へと静かに戻る。

その日、なぜか俺は喜多に告白をして盛大に振られた男として学校の中でもちよつとした話題となつたのはまた別の話である。

#5 強面ぼつちとエナジードリンク

喜多の勧誘を失敗した次の日、昼休みになると明らかに後藤が死にそうな顔をして机に突っ伏していた。

おそらく、バイトが嫌すぎてああなつてているのだろう。

今日はそつとしておこう。

しかし、なぜか喜多の勧誘を失敗して以来なぜか俺はフラれた強面ぼつちとして哀れみの視線を送られる様になっていた。なぜた。

それにして、何故喜多は結束バンドの名前を出した途端に逃げていってしまったのだろう。STARRYで仕事している間に見かけた事はないが、もしかしたら俺がバイトとして入る前は常連だつたりするのだろうか。

そうだ、バイトといえばつい先日ついに後藤がバイトメンバーとしてSTARRYで働いていた。あの時は、感度つて涙が止まらなかつたが周りの人から泣いている姿すら怖いようで俺は何をしても強面の影響で全てダメになるらしい。

コミュ症を拗らせた後藤がバイトを上手くこなす事が出来たのかと聞かれれば、ノーだ。

カウンターでの接客は顔を出さず瞬時にドリンクを提供し、伊地知先輩に怒られていた。いやあ、伊地知先輩は怒っている姿も可愛かった。

しかもドリンクの場所を覚えるために歌にして体に覚えさせるなど、後藤にしかできない芸当をやつて退けたりもしていたが伊地知先輩達と話すに連れ後藤も変わろうと決心したのか人の目を見て接客をしていた。まあ、引き攣った笑顔で笑われてはいたが……。

因みに俺は基本接客業は任されない。理由はご存知強面だから。強面つて理由だけで色々というか大半が制限されていることに解せないが、俺が接客なんてした日には人一人来ない未来が見えるのがまた悲しい。

初日のバイトがなんとか上手くいつて気分に乗つていた後藤だったが、次の日は熱を出して寝込んだとか。後藤曰く、バイトに行きた

くない余り氷風呂に浸かり全身に冷えピタを貼り扇風機の前でギターを弾いていたとか……人と話す根性はないのにそう言うところだけ根性があるのは謎だ。

それはそれとして――

「……後藤の奴何やつてんだ?」

先程から後藤が教室の入り口をわずかに開け、教室の中を除いていた。教室の中と言うより、主に喜多を見ている。まさか後藤も喜多がギターを弾ける事や歌が上手い事を聞きつけてきたのか? いやしかし、結束バンドの名を出せば断られるのは明白……ここはさりげなくR O I Nでも送つておこう。

しばらく後藤が喜多を眺めていると、痺れを切らした喜多が後藤に話しかけていた。

「につ、二組の後藤さんよね? 誰かに用事?」

「……」

後藤は結束バンドメンバーと俺以外、外で喋る事はない。

つまり、いつも通り明るい笑顔を向けて話しかけてくる喜多とどう話せば良いのか完全に脳の処理が追いついていない様でフリーズしていた。

「おい、後藤――」

「バツ! キツ! ボツ!」

「突然のヒューマンビートボックス?!」

やばい、つい大声を出してしまったせいで注目を集めてしまった。いや、逆に後藤に視線が行かないからいいのか?

とにかく、後藤に助け舟を出すべく再び後藤と喜多の方へ視線を向けると何故か喜多もビートを刻んでいた。

「えつと……ブツツク。パーツクツカツカパーツク……」

なんだ可愛いなおい。

ならないヒューマンビートボックスに若干照れながらも、後藤のためにビートを返す喜多。いや、そもそも後藤のあればビートなのかな? まあ人それぞれ個性は違うからああいうビートボックスもあるか。

喜多に気を遣われたのが追い討ちとなり、さらに恥ずかしくなったのか後藤は何処へと逃げ去つてしまつた。

後藤の後を追いかけようとも思つたが、喜多がしばらくして教室を飛び出していったので俺が追いかけるとややこしくなると思い一人悲しく弁当を食べた。

相変わらず、視線が痛い。

* * * *

俺は何故が結束バンドのR O I N グループに入れられているのだが、大抵俺が何かを言う事はなくただ三人の会話をただ眺めているだけの事が多い。

結束バンドのメンバーと言えば、当然後藤もいるわけで――

『すみません、E D Mかけてリョウさんと虹夏ちゃんと吉田くんでエナドリ片手に踊り狂いながらバイトしてて下さい!』

「何だこれ」

やはり後藤はメールでも後藤の様でたまに奇妙なメールが送られてくる事がある。

後藤の事だ、おそらく喜多にパリピなバンドだなんて言つたりしているのだろう。

財布を開いて残りの残高を確認すると、下北沢へと向かう。流石に後藤の勇氣ある勧誘を無碍にするわけにもいかず、途中の薬局でエナドリを6本入り一箱を買ってS T A R R Yに向かう事にした。

下北沢に着くと、丁度伊地知先輩と山田先輩がエナドリを購入していた。伊地知先輩は抱えきれないほどの持ち、山田先輩も一箱と一本飲む用を買つていた。

「お二人もエナドリですか」

「いやあぼつちちゃんが何を言いたいのかさっぱりだけど、結構真面目そうなR O I N だつたし……ってあ！ ぼつちちゃん！」

伊地知先輩がトタトタとエナドリが落ちない様に走つてゆく先是後藤ともう一人、喜多の姿があつた。後藤は何故か顔を驚掴みにされており、喜多は伊地知先輩の声を聞くなりギギギと壊れたロボットのように後ろを振り返つた。

そして、伊地知先輩は喜多を見るなり驚きの表情を見せた。

「あ～、逃げたギター！」

「逃田義多？」伊地知先輩、あれは喜多です。喜多郁代

「分かってるよ?! 誰なのその逃げるのが得意そうな人」

流石伊地知先輩、ツッコミがキレツキレだ。

そういえば山田先輩はしつかり着いてきてるのだろうか。心配になり背後を振り向くと、しつかり着いてきていた。が、喜多は山田先輩を見るなり土下座をし始めた。

「公衆の面前で土下座をするとは……ロックだ」

「え？ あれってロックなの？」

ふつ、まだロックを理解できていない様だな後藤。流血沙汰もロックとか言うロック免罪符の名の下には何事もロックなのさ！ 僕も何を言っているのか自分自身でも理解していないが、とにかくロック免罪符最高！

* * * *

「なるほど、喜多はギターが出来ないのにギターが出来ると言つて結束バンドに入つたは良いもののライブ前になつた途端怖くなつて逃たと……」

「その通りです……」

喜多が土下座をした後、なんとかSTARRYに喜多を連れ込み後藤と喜多から諸々の事情を聞いていた。

それにも、よくギターが弾けないのにバンドに入ろうと思つたな。いや、行動力がえげつないだけなのかもしれない。クラスでも話題の中心にいる様な人物だし。

「だから頑なに合わせの練習参加しなかつたんだね」

「突然音信不通になるから心配してた」

「先輩っ！」

喜多感動しているようだが正直言つて山田先輩は変人だ、しかもクズ属性付きの。何を考えているか正直わからないし、なぜかこの人金欠なんだよな。伊地知先輩曰く金持ちの家らしいのに……。音楽では力強い味方の筈がそれ以外は中々信用できない、どれくらい信用出

来ないかと言えばカプコン製のヘリコプター位信用出来ない。

おそらく今も感動している喜多が考へてゐる事より遙か斜め上の心配の仕方をしてゐるだろう。

「死んだかと思つて最近は毎日お線香あげてた」

「いや、勝手に殺さないで」

「音信不通イコール死んだは判断が早すぎですよ山田先輩」

「あの……怒らないんですか？」

「気づかなかつた私達も悪いし、それに……あの日はなんとかなつたしね！」

申し訳なさそうに謝罪する喜多にも慈悲を与える大天使ニジカエル、やっぱ伊地知先輩しか勝たないんだよ。

「でつ、でも！ それじやあ私の気が治りません！ 何か罪滅ぼしさせて下さい！」

「そんな事言われてもなあ……」

「じゃあ今日一日ライブハウス手伝つてくれない？ 今日一日忙しくなりそうちだから」

カタカタとパソコンを打ちながら喜多に提案してくる店長。たしかに、今日のスケジュールは人気のバンドがチラホラあつた筈。喜多は接客が上手いだろうし俺や後藤みたいな虫ケラよりも戦力になる筈だ。

「いや、十分助かるよ！ よろしくね！」

「わ、私でよければ……」

「なんとか治つたな後藤」

「そ、そうだね……わ、私も頑張らないと……」

珍しく後藤も張り切つてゐるようだし、喜多もライブハウスを手伝つてくれる事にもなつたし今日は何かと忙しくなりそうだ。

「じゃあこつちきて着替えて

「着替え？」

* * *

「——なんでメイド服？」

「あいつ意外と使えるな」

絶対この人の趣味だろ。

「ピギヤツ！」

あ、後藤が逝つた。

「つて、後藤おおおおおお！」

今日のバイトは忙しくなる……そう、

いろんな意味で。